

冬のソナタの新しさはどこ？

日本の大衆文化流入「韓国映画」の大変貌 — 時期一致は偶然か

巖 基珠 ネットワーク情報学部助教授

日本にも韓流が上陸した。それにつれ韓国語についての関心も高まり、NHKの教材が10万部以上売られたそう。90年代から中国や東南アジアで韓流が流行っているが、そちらではたぶん韓国語を学ぼうとする動きはあまりないのではないかと思う。さすが日本人は勉強好き。

私は韓国人でありながらも『冬のソナタ』の存在は日本のテレビで知った。周りの人たちにしきりに「まだ見てないんですか」と言われ、結局見ることは見た。しかし、少なくとも私が見る限り、そのストーリーには何にも新しいものがない。『冬のソナタ』は典型的な韓国のメロドラマなのである。

内容は古いメロドラマ

韓国のメロドラマの大半が純愛を描いている。その構成は、三角・四角の愛情関係、避けられない不運とそれに従う別離、偶然な再会、ハッピーエンドなどになっている。二、三百年前の韓国(朝鮮)には『春香伝』という語り物があった。そのストーリーを現代的に紹介すると次のようである。芸者の娘である春香と貴族の息子である青年が、厳しい身分制限があるにも関わらず身分を越えて恋に落ちる。やがて青年の父が転勤になり、青年の両親から結婚への許諾が得られない二人は離れ離れになる。そこに春香との結縁を望む他の貴族の男が現れ権力で春香に迫る。しかし、春香は死んでも屈しない意志を見せ、死にかかる運命に置かれる。そこに出世した恋人の青年が戻って彼女を救い、二人は結ばれる。細かいところを省いたら『冬のソナタ』と基本的な構造が似ていないだろうか。『春香伝』は韓国で一番古いメロドラマかも知れない。

『冬のソナタ』のようなドラマは80年代後半の日本にもあった。『君の瞳をタイホする！』を始めとする、言わばトレンドドラマがそれである。90年代になって韓国でもトレンドドラマが続々出てきた。その中には、日本のトレンドドラマを剽窃(ひょうせつ)したのではないかと疑わしいものが幾つもあった。しかし、剽窃と言にくい所の一つが家族の存在感の差だった。つまり、韓国のはトレンドドラマにしても家族、特に親が主人公の二人の愛に深く関わって問題を複雑にすることは珍しくない。つまり、韓国のドラマにおいて家族は欠かせない要素の一つである。それは韓国社会の実相を反映した結果である。実際韓国では、結婚していない人は歳が幾つになっても親との同居が当たり前で、結婚するまでは親の干渉が当たり前のように思われている。従って、ドラマではなく現実でも親の干渉で結婚できないカップルはいくらでもある。日本も昔はそうだったかも知れないが、現在の日本人の暮らしぶりとは少々違う感じがする。

小説もそうだが、ドラマが人気を得るためには、その作品が置かれているコンテキストを無視してはいけない。『冬のソナタ』で家族関係(家族愛なのかどうか疑問だが)が大事な部分を占めているのも、そのような基盤を重視するからだと思う。韓国トレンドドラマの典型的なパターンに従っているのである。

するとどうしてこの時代に日本でこのような典型的な韓国のメロドラマがヒットするのか。韓国でも人気があったことはあったが、ここまでには至らなかったようだ。このような疑問は誰もが持っているらしく、あちこちその理由がいろいろ書いてある。それを簡単に紹介すると、男性主人公・女性主人公の清純な顔、単純なラブストーリーを超えた家族愛を描いたところ、現在日本のドラマでは見られない純愛を描いたところ、このドラマの主な視聴者である30~40代女性たちの学生時代にソウルオリンピックが開かれ、そのお陰で彼女達は韓国について悪いイメージを持っていない。従って韓国ドラマが受け入れやすかった、などなど。それぞれなるほどと思われる部分と、そうかなと思われる部分が混ざっている。本当は何だろうか。多分それらしい理由はいくらでも付けられるが、実の理由は当てられないと思う。

また空論になるだろうが、素朴な感想をいくつか付け加えてみよう。まず、このドラマの原題を日本語で直訳すると『冬の恋歌』である。『冬のソナタ』の方がよりお洒落に見える

るのは、単純に漢字とカタカナの差かもしれないが、とにかくすばらしい(?)訳だと思う。

新鮮な画面を演出

次に感心したのは、画面の撮り方と演出の新鮮さ。「韓国にこんなに綺麗な景色があったっけ」という感じだった。以前の韓国ドラマや映画を見た時はなかなかなかった感想である。ドラマもそうだが、ここ数年さまざまな要因で韓国映画は眩しい成長を見せている。映像に頼る部分がより大きい映画における進歩が、ドラマの方にも影響を及ぼしたのではないと思われる。

以前のものと大きく変わったところは他にもある。以前にはドラマも映画も女優を見せるためのものが多く、メロドラマの場合、内容的にも悲恋の女性主人公がストーリーを引っ張っていくような形が多かった。しかし、今回のドラマは男性主人公が中心になっている。ストーリー展開においての主役だけではなく、見ものとしても男性主人公に力を入れているように見える。例えば、男性主人公の鮮やかな衣装に比べると女性主人公の衣装は地味で、対照的。今話題になっている韓国の俳優やタレントが、主に男性であることも偶然ではないようだ。

韓国における日本文化

このような韓流に対して、日本のものはどこに行ってしまったのか不満に思う人はいないだろうか。ところが、韓国における日本のドラマや音楽の反響も結構なものである。韓国で日本の大衆文化輸入が公式に認められたのは98年からなので、そんなに経っていないはずが「かわいい」などの簡単な言葉を分かる人が結構増えたという話を聞いたことがある。以前にも日本のアニメーションは、日本のものであることを伏せたまま地上波で放送されたりした。しかし、映画館で日本の映画が上映されたり、テレビで日本のドラマが放送されたりすることはまったくなかった。振りかえってみると、韓国政府が日本の大衆文化輸入を発表した時、反対の声が高く、確かに何回かデモもあった。その理由の一つは、アニメーションなどの輸入経験から、日本のものがたくさん入ると、韓国のあらゆるジャンルが衰退するのではないかと恐れたからだと思う。その後、反対の声も空しく日本の大衆文化が何回かに分けてジャンルを広げつつ韓国に輸入されたが、まだ恐れたほどの結果までは及んでいない。むしろ、その頃から韓国の映画やドラマが目立ち始めたのではないと思われる。いま全盛期を疾駆している韓国の映画を見ると、『八月のクリスマス』(98年)や『シュリ』(99年)あたりから大きく流れが変わったように思う。このような日本の大衆文化輸入の開始と韓国映画の変貌との时期的一致は偶然なのだろうか。

何でもそうだが、独占しているところに発展はないものである。競争相手にならない相手と競争してあっけなく潰れてしまうこともあるが、相手になれるなら競争によってより成長するということは誰もが知っている。しかし、競争相手になれるのかどうか、または競争というストレスに耐えられるかどうか恐れ、自分のことになると競争はなるべく避けたい気持ちになりやすい。しかし、時代の流れはそのような安住を許してくれないような気がする。国際化社会というのはまさにそのような意味ではなからうか。必ずしも発展とは言い切れないところがあるかも知れないが、少なくとも今までの競争とは違う次元での競争によって、新しい自分の発見の可能性が無限に与えられた側が韓国の最近のドラマなのだと思う。

オム・キジュ=ソウルの成均館大学大学院国語国文学科博士課程修了。博士(文学)。東京外国語大学助教授を経て、03年から本学で教鞭を執る。専門は韓国文学。主な担当科目はコリア語。

【ニュース専修2004年8月号3面】